

# 山口大学 埋蔵文化財資料館だより

No. 5

〔1989年春の号〕  
山口大学埋蔵文化財資料館

企画展《さわってみる歴史》第3回

## 『学内発掘10年の歩み』展 まもなく開催!!

当資料館が昭和54年に学内の遺跡調査を行なうようになってから、はや10年が過ぎました。これの一つの区切りとして、これからお一層、当館の充実を図ってゆきたいと思っています。

調査10年にあたり、これまでの当館の発掘の成果を一堂に展示しました。学内のどのあたりから、どんなものが見つかったのか、このチャンスに、ぜひ手に取ってご覧下さい。

期間 平成元年6月1日より  
時間 8:30~17:00 (土曜は12:30まで)  
場所 埋蔵文化財資料館 展示室



目次	
『学内遺跡の調査10年』展 まもなく開催!!… (1)	Q & A …なぜほんの小片から、遺物の全形や時代がわかるの?… (4)
学外の遺跡見学記 吉野ヶ里遺跡… (2)	遺物からの「発見!!」… 吉田遺跡の木簡… (5)
接点 5 …【文献史学と考古学 - 木簡 -】… (3)	業務報告… (6)



去年の暮れ、藤ノ木古墳に匹敵するほどの話題をさらった（成果からいえば、藤ノ木古墳を遥かに凌ぐでしょう）ものとして、奈良時代の宰相長屋王の屋敷跡の調査がありましたね。3万点をこえる膨大な量の木簡が出土し、文献には全く残されていなかった当時の貴族の私生活を、生々しくよみがえらせることになりました。思えば昭和3年、三重県の袖井遺跡で初めて木簡が発見されてから、実に還暦を迎えた年の大発見だったわけです。

木簡とは、紙が貴重品だった使われた、細長い木の板のこと。て書き直すので、役人は「刀筆

袖井遺跡ではあまり注意される木簡が平城京で多量に出土し昭和54年には木簡学会が誕生、て、一層深い古代の探求ができれば、古代の低湿地遺跡を発掘す

した万端の準備のもとで調査を行なっています。前号（No4）のQ&Aでご紹介したとおり、木製品は、発掘後の処置を誤ると形が崩れ、文字を読むどころではなくなりますから。

古代史を、古文書の読解から復原する文献史学と、遺跡や遺物の発掘から復原する考古学とでは、同じ歴史学のわりにはあまり接触がありませんでした。木簡の発見は、その間を取り持ち、学際的な協力を強烈に促すものでした。

その成果の一つとして学史にも残るのが、長年の「郡評論争」に終止符を打った藤原京の木簡の例でしょう。天化の改新の詔（大化2=646年発布）で規定された『日本書紀』に記してある郡の制度は、史実なのか、それとも大化当時には評制だったとすると、郡制に変わったのはいつなのか、常々討論されてきたのですが、藤原京の発掘で、己亥（699）年銘の「阿波評」、夔子（700）年銘の「小丹生評」、大宝二（702）年銘の「知多郡」などの木簡が出土したことにより、大化当時はまだ郡制ではなく、評から郡への変化は大宝元（701）年の大宝律令の制定によるものだと判明したのです。

木簡の出土位置や状態から使用・廃棄時の情報を引き出し、かつ現物を保存するのは、考古学に精通した者の仕事です。しかし逆に、木簡の文字から情報を読み取りそれを歴史の中に位置付けることは、文献に精通した人々に任せるのが最良です。そしてその共同成果こそが、文献・考古の両方面に、図り知れない多大な知見をもたらすのです。

【次号は…『人類学と考古学 -人骨-』】



時代にその代用品として広く書き損じはナイフで削り取ったの吏と呼ばれたほどです。なかった木簡も、文字の読めた昭和36年以降注目を集め、文献史学と考古学とが提携するようになりました。現在でる時には、木簡の発見を予想

長屋王邸の木簡『長屋親王宮紀大略』



平城京の木簡『己亥年十月上挾國阿波評松里…』

己亥年十月上挾國阿波評松里

# Q & A なぜほんの小片から、遺物の全形や時代がわかるの？

(企画展アンケートの質問：農学部・男子学生より)

一言で答えるならば、「時代ごと・地域ごとに『流行』があり、それが『移り変わる』」からです。一見何の変哲もない土器のかけらでも、さまざまな小さな特徴を持っています。



(現寸)

それを見つけて、いつ、どこで流行した、どのような形の土器の一部分だろうと類推するわけです。

流行のひとつをご紹介します(左)。土器の小さなかけらですが、表面はツルツルに磨かれ、ギザギザのある貝の縁で模様が描かれています。これは、弥生時代の前期末頃、関門海峡沿岸を中心に大流行した模様で、大多数が壺の肩の部分に描かれたことがわかっています。このようなかけらが発見されたら、弥生時代の前期末に使われた壺の、肩の部分とと考えてまず

大学会館前庭の  
食糧貯蔵穴から発見

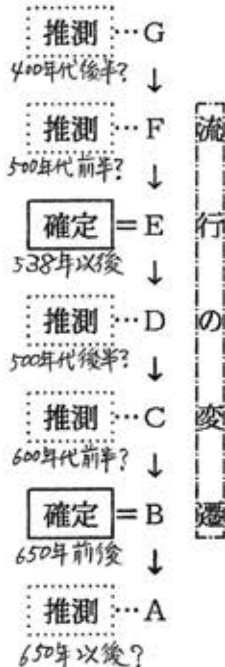
間違いなく、また、これと一緒に捨てられていたものも、同じ時代のものとして推定できます。

この模様は、弥生時代の初めには、普通の細い棒状のもので描いていましたが、次第に貝で描くようになってから大流行し、中期の半ばにはぱったり描かなくなります。これが、「関門」周辺地域での、「弥生時代前半」という時代の、壺の模様の『移り変わり』です。

『移り変わり』の順序は、二つの方法を併用して判断します。物の埋まっていた地層の

堆積の順序から物の新旧をも見極める方法と、物の形や質が、前の風習を残しながら少しずつ変わっていくことから物の新旧を類推する方法ですが、これらはいくまでも「AよりBの方が古く、BよりもさらにCの方が古い」という新旧の順序を決めるに過ぎません。実際の層の上で「Aが西暦△年あたりに作られたもの」と断言することはできないのです。実際の暦年代を知るには、年代がズバリ書き込んであったとか、實在年代が確実にわかっている建物跡から見つかったとかの、偶然の発見を待つしかなく、確率は微々たるものです。また、理化学的な年代測定方法の開発が進んでいますが、まだ頻りに利用するには至っていないのが現状です。

でも、ものの新旧の順序(流行の変遷)「C→B→A」がわかっているれば、いつかBの年代ひとつがわかった時、AとCもある程度推定できますよね。そのためにも、考古学に携わる人々にとって、この『流行』と『移り変わり』とを見抜くことは最低の条件となるのです。





## 吉田遺跡の木簡

『接点』のコーナーで木簡を取り上げたので、それに関連して、ここ山口大学吉田遺跡の大学会館敷地から発掘された木簡を、ご紹介しましょう(右)。

幅3.8cm、厚さ5mm。片端は折れ、長さ10cmが残るのみです。赤外線撮影の結果、墨痕は見当りませんでした。木簡の左右に入った切り込みは、木簡を縛りつけるためのもので、おそらく中央への貢進物に付ける荷札(符札)として使われたものです。付札は地方の役所相当施設で取り付けますから、吉田遺跡には古代の役所があった可能性があるのです。今まで山口県内で木簡が出土した遺跡も、長門国府跡、長門国分寺跡、周防国府跡、周防国分寺跡など、官庁的性格の濃い遺跡です。



吉田遺跡発見の木簡

吉田遺跡付近の地名を記すものとして、「周防国吉敷郡神前郷」の戸主が調として貢納した塩の付札が、平城京で見つかっています(左)。旧吉敷郡内(現吉敷郡+山口市全域+宇部市岐波+防府市天道)は、古代の郷名が現在の地名にほとんど踏襲されず、郷の場所は、全く想像の域を出ていませんでした。「神前郷」にしても、「神の前」と書くのだから、宮野の仁壁神社(周防三ノ宮)か、吉敷の赤田神社(周防四ノ宮)の周辺だろうという程度でした。ところがこの木簡の発見により、宮野や吉敷が塩を作るには向かない地理条件にあることから、新たに、海沿いの秋穂周辺、特に秋穂二島(二島)の「幸崎」が「神前」の名残である可能性が指摘されています。

このように、吉田遺跡の属する旧吉敷郡は、周防鑄銭司もあり、木簡とは縁の深いところです。山口県内では、残念ながら文字の読める木簡は長門国分寺跡の一例だけですが、今後、この吉田遺跡で第二、第三の木簡が発見されることを私達は大いに期待しています。



### \*ご自宅に遺跡に関する古い時代のものが眠っていませんか?\*

- \* 当館では、自宅で保管されている土器、近所で採集されたものなどを資料化し、\*
- \* その蓄積、充実を図ってゆきたいと考えています。今使っていない古そうなうつ \*
- \* わ、何かいわれがありそうなもの、その他ちょっと気になるーこれはただの石・ \*
- \* 木あるいは鉄とは思えない!ーものなどお持ちでしたら、ぜひ御一報下さい。 \*

\*\*\*\*\*

平城京跡発見の木簡

周防国吉敷郡神前郷戸主阿曇五百万呂口同

神前郷

神前郷

神前郷

## 業務報告 【平成元年2月～3月】



★調査……立会調査2件を、下記の学内工事に伴い実施。

1. 教育学部附属山口中学校 屋内消火栓用貯水槽設置のための配管工事 (2月6日)  
……東西に走る管路全面に、河川の埋土と思われる土を確認。西側には遺物  
包含層もあった。土師器・磁器・黒曜石の剥片などが出土した。
2. 医学部 テニスコートの新設 (3月7日) ……顕著な知見なし。
3. 吉田団地 防火貯水池取設 (3月29日) ……国際交流会館の横。掘削工事終了後の  
立会調査となった。遺物はなかったが、東西方向に流れる河川跡を確認。

★埋蔵文化財資料館運営委員会 (3月22日)

……5月24日～3月22日の調査報告と、館員交代・新館長選任についての協議。

★外部からの図書寄贈【2月～3月】 凡例：【発行所 (個人寄贈者)】…『書名』  
【貸し出していますので、ご利用下さい】

- 【富山大学人文学部考古学研究室】…『立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ』  
【石川県立埋蔵文化財センター】…『石川県立埋蔵文化財センター年報』第8号  
『八田中遺跡』『竹生野遺跡』『白江梯川遺跡Ⅰ』  
『下安原海岸遺跡』『津幡町刈安野々宮遺跡』  
『石川県能美郡辰口町岩内遺跡』  
『石川県能美郡辰口町辰口西部遺跡群Ⅰ』  
『五十里A遺跡 付 五十里洞穴中世墳墓』  
『敷地天神山遺跡群』『吉崎・次場遺跡』

- 【勸京都府埋蔵文化財調査研究センター】…『京都府埋蔵文化財情報』第30号  
【下関市教育委員会】…『長門国分寺 -長門国府周辺遺跡発掘調査報告Ⅵ-』  
【佐賀県小城町教育委員会】…『寺浦廃寺発掘調査概報Ⅰ』『八反遺跡』  
【別府大学付属博物館】…『宮地前遺跡』『広瀬井手日記 (二)』

★資料貸出記録

\* 図書 1件 (学生1) : 未返却



\*\*\*\*\*  
\* 本冊子は、各講座、教官に一部ずつ配布していますが、ぜひ学生個人でもお持ちい  
\* ただきたいと考えています。当館で配布しておりますので、ご希望の節は気軽にこ来  
\* 館下さい。また、各学部事務室にも置いてありますので、ご自由にお取り下さい。  
\*\*\*\*\*

### 編集余話

新年度が始まりました。清新な  
空気と多少のぎこちなさが相半  
ばする春爛漫。当館も館員が1名  
交代し、リフレッシュしました。  
本年度もよろしく願います。  
吉野ヶ里遺跡を見学しました。  
同業者として、佐賀県の調査員諸  
氏に深い同情と期待を寄せていま  
す。梅雨になる頃、あの広大な遺  
跡はどうなっているのでしょうか。

山口大学 埋蔵文化財資料館だより

..... No.5 .....【1989年春の号】.....

発行 平成元年4月28日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

〒753 山口市大学吉田1677-1

☎代 (0839)22-6111 内線299

利用案内(入館無料)

(平日)8:30～17:00

(土曜)8:30～12:30

日・祝 休館

